

9月予報（全13枚）

病防第71号  
平成20年9月1日

各関係機関長 様

熊本県病虫害防除所長

病虫害発生予察情報について（送付）  
平成20年度発生予察情報第6号を下記のとおり発表したので送付します。

平成20年度発生予報第6号（9月予報）

1 向こう1ヶ月の気象予報：平成20年8月22日福岡管区気象台発表（単位：％）

要素	予報対象地域	低い （少ない）	平年並	高い （多い）
気温	九州北部全域（含、山口県）	20	40	40
降水量	九州北部全域（含、山口県）	30	40	30
日照時間	九州北部全域（含、山口県）	30	40	30

2 発生予報の概要

作物	病虫害名	発生量		作物	病虫害名	発生量	
		平年比	前年比			平年比	前年比
普通期 水 稻	穂いもち	やや少	並	茶	炭疽病	やや少	並
	紋枯病	並	やや少		チャノカゲンハマキ	やや少	やや少
	ヒゲハダニ	やや少	少		チャハマキ	やや少	やや少
	カメムシ類	やや少	少		チャノホソガ	やや少	やや少
大豆	ハダニヨトリ	並	やや少		チャノキヨアザミウサ	やや少	やや少
	カメムシ類	並	やや少		チャノミドリヒメコバエ	並	並
かんきつ	かいよう病	やや少	並	ナ シ	かんきつハダニ	並	並
	黒点病	並	並		黒星病	やや多	やや多
	ミカンハダニ	やや多	やや多		うどんこ病	並	並
	チャノキヨアザミウサ	並	やや少		ハダニ類	少	少
カキ	炭疽病	並	並	果樹全般	果樹カメムシ類	多	多

作物	病害虫名	発 生 量		作物	病害虫名	発 生 量	
		平年比	前年比			平年比	前年比
夏秋 トマト (高冷地)	葉かび病	並	並	夏秋 果菜類	コナジラミ類	㊦多	㊦多
	灰色かび病	並	並		アザミウマ類	㊦多	㊦多
夏秋 ナス (平坦地)	すすかび病	㊦少	㊦少	冬春 果菜類	コナジラミ類	-	㊦多
	うどんこ病	㊦少	㊦少		ハダニ類	㊦多	㊦少
イチゴ (育苗床)	炭疽病	並	並	夏秋 キャベツ (高冷地)	コナガ	㊦少	㊦少
	うどんこ病	㊦多	㊦多		ハスモンヨトウ	並	並
夏秋 キャベツ (高冷地)	細菌性病害 (黒腐病、 軟腐病等)	並	並	野菜全般	オオタバコガ	並	並

### 3 予想発生量、発生時期、根拠、対策等

イネ（普通期）

#### 1) 穂いもち

(1) 発生量：やや少

(2) 根拠 ア 8月の巡回調査では、穂いもちの発生は認められなかった（平年の発病株率 6.8 %）。

イ 病害虫防除員からの報告では、8月の穂いもちの発生は平年より少なかった。

ウ 気象予報によると、9月の気温は平年並か高く、降水量は平年並の予想である。

(3) 対策 ア 晩期水稻において、上位葉に病斑が見られるほ場や、病斑が多く見られるほ場では、穂ばらみ期から穂揃い期にかけて防除を行う。

#### 2) 紋枯病

(1) 発生量：並

(2) 根拠 ア 8月の巡回調査では、発病株率 1.0 % (平年 2.5 %) と平年よりやや少ない発生であった。

イ 気象予報によると、9月の気温は平年並か高く、降水量は平年並の予想である。

(3) 対策 ア 晩期水稻において、穂ばらみ期の発病株率が要防除水準（発病株率 20 %）に達した場合は、粉剤、水和剤等により穂ばらみ期から出穂期にかけて防除を行う。普通期水稻においても、上位葉鞘へ病斑が伸展している場合は防除を行う。

#### 3) トビイロウンカ

(1) 発生量：やや少

(2) 根拠 ア 8月の巡回調査では、発生は認められなかった（平年の寄生頭数 0.6 頭 / 10 株）。

イ 予察灯への誘殺数は、生産環境研究所（合志市）では平年比少、天草農業

研究所（天草市）では平年比少であった。

ウ 病害虫防除員からの報告では、8月の発生は平年並～少であった。

エ 気象予報によると、9月の気温は平年並か高く、降水量は平年並の予想である。

（3）対策 ア 要防除水準は株当たり3頭（収穫30日前）である。発生量はほ場や地域による差が大きいので、ほ場での発生状況を確認して防除の要否を判断する。

イ 出穂以降の防除は株元への到達度が劣るので、粉剤及び液剤で防除する際は株元へ付着するよう丁寧に行う。

#### 4）カメムシ類

（1）発生量：やや少

（2）根拠 ア 生産環境研究所（合志市）における予察灯調査では、クモヘリカメムシ、ミナミアオカメムシ及びアオクサカメムシは平年より少なく、シラホシカメムシとアカスジカスミカメは平年並であった。

イ 病害虫防除員からの報告では、8月の発生は平年並～少であった。

エ 気象予報によると、9月の気温は平年並か高く、降水量は平年並の予想である。

（3）対策 ア 常発地帯では、穂揃期とその7日～10日後の2回防除を行う。

イ イネ科雑草（エノコログサ、ヒエ類、メヒシバ）が繁茂し出穂している休耕地等が近くにある場合には、被害を受けやすいので注意する。なお、出穂期以降に周辺の除草を行うと、雑草から水田へ飛来し被害を助長することがあるので、除草は控える。

### 大豆

#### 1）ハスモンヨトウ

（1）発生量：並

（2）根拠 ア 8月の巡回調査では、幼虫数は10.0頭/10株（平年11.6頭/10株）と平年並であった。

イ フェロモントラップ調査においては、生産環境研究所（合志市）、高原農業研究所（阿蘇市）、い業研究所（八代市）ともに平年並の発生であった。

ウ 病害虫防除員からの報告では、8月の発生は平年並～やや少であった。

エ 気象予報によると、9月の気温は平年並または高く、降水量は平年並の予想である。

（3）対策 ア 初期の食害発生に注意するとともに、白変葉（若齢幼虫の食害で白化した葉）が認められたら防除を行う。なお、ほ場によって発生状況が異なるため、防除適期を逃がさないようにほ場をよく見回り、発生を認めたら早めの防除を心がける。

イ 老齢幼虫に対しては薬剤の効果が低下するため、防除効果の高い若齢幼虫期に防除を行う。

ウ 8月に発生が少なかったほ場でも、9月に入り多発することがあるので、今後の発生に注意する。

#### 2）カメムシ類

（1）発生量：並

（2）根拠 ア 8月の巡回調査では、寄生頭数は0.1頭/m<sup>2</sup>（平年0.4頭/m<sup>2</sup>）と平年並であった。

イ 生産環境研究所（合志市）の予察灯調査では、ミナミアオカメムシ、アオクサカメムシの誘殺数は平年より少なかった。

ウ 病害虫防除員からの報告では、8月の発生は平年比やや少であった。

エ 気象予報によると、9月の気温は平年並または高く、降水量は平年並の予想である。

（3）対策 ア 少発生でも被害が大きい。加害時期の開花終期～子実肥大期に防除を行う。

イ カメムシ類の発生は、ほ場間差が大きく、近隣に発生が確認されなくても多発することがあるので注意する。

## 茶

### 1) 炭疽病

(1) 発生量：やや少

(2) 根拠 ア 8月の巡回調査では、病葉数は4.2葉/m<sup>2</sup>(平成8.9葉/m<sup>2</sup>)と平成よりやや少ない発生であった。

イ 病害虫防除員からの報告では、8月の発生は平成並～やや少であった。

ウ 気象予報によると、9月の気温は平成並または高く、降水量は平成並の予想である。

(3) 対策 ア 常発地では、摘採残葉の発病状況に注意するとともに、秋期の発生は翌春一番茶の収量・品質に及ぼす影響が大きいので、萌芽～3葉期に防除する。

### 2) チャノコカクモンハマキ

(1) 発生量：やや少

(2) 根拠 ア 8月の巡回調査では、被害葉数は1.0枚/m<sup>2</sup>(平成3.7枚/m<sup>2</sup>)と平成より少ない発生であった。

イ 生産環境研究所(合志市)のフェロモントラップでは、8月1半旬に平成より高いピークが認められたが、その後は少なく推移している。

ウ 茶業研究所(御船町)のフェロモントラップでは、平成並かやや少なく推移している。

エ 病害虫防除員からの報告では、8月の発生は平成並～少であった。

オ 気象予報によると、9月の気温は平成並または高く、降水量は平成並の予想である。

(3) 対策 ア 秋芽の被害を軽減するため、萌芽期に若齢幼虫を対象に防除を行う。

### 3) チャハマキ

(1) 発生量：やや少

(2) 根拠 ア 8月の巡回調査では、被害葉は認められなかった(平成0.0枚/m<sup>2</sup>)。

イ 生産環境研究所(合志市)のフェロモントラップでは、8月2半旬に平成より高いピークが認められたが、その後はやや少ない発生であった。

ウ 茶業研究所(御船町)のフェロモントラップでは、平成よりやや少ない発生であった。

エ 病害虫防除員からの報告では、8月の発生は平成比少であった。

オ 気象予報によると、9月の気温は平成並または高く、降水量は平成並の予想である。

(3) 対策 ア 秋芽の被害を軽減するため、萌芽期に若齢幼虫を対象に防除を行う。

### 4) チャノホソガ

(1) 発生量：やや少

(2) 根拠 ア 8月の巡回調査では、被害葉数は1.1枚/m<sup>2</sup>(平成4.7枚/m<sup>2</sup>)で平成より少ない発生であった。

イ 生産環境研究所(合志市)のフェロモントラップでは、平成より少く推移している。

ウ 茶業研究所(御船町)のフェロモントラップでは、平成並で推移している。

エ 病害虫防除員からの報告では、8月の発生は平成並～少であった。

オ 気象予報によると、9月の気温は平成並または高く、降水量は平成並の予想である。

(3) 対策 ア 新葉にのみ産卵するため、秋芽萌芽期に防除を行う。

イ 三番茶不摘採園では発生が多くなりやすいので注意する。

5) チャノキイロアザミウマ

(1) 発生量：やや少

(2) 根拠 ア 8月の巡回調査では、寄生葉率は2.6%(平成22.2%)と平成並の発生であった。

イ 生産環境研究所(合志市)の黄色粘着トラップでは、平成並の発生であった。

ウ 茶業研究所(御船町)のたたき落とし調査では、平成よりやや少ない発生であった。

エ 病虫害防除員からの報告では、8月の発生は平成比やや少であった。

オ 気象予報によると、9月の気温は平成並または高く、降水量は平成並の予想である。

(3) 対策 ア 加害は主に新葉のみ行われるので、秋芽萌芽期に防除を行う。

6) チャノミドリヒメヨコバイ

(1) 発生量：並

(2) 根拠 ア 8月の巡回調査では、寄生葉率は0.8%(平成22.5%)と平成より少ない発生であった。

イ 茶業研究所(御船町)のたたき落とし調査では、平成より多い発生であった。

ウ 病虫害防除員からの報告では、8月の発生は平成比やや少であった。

エ 気象予報によると、9月の気温は平成並または高く、降水量は平成並の予想である。

(3) 対策 ア 加害は主に新葉のみ行われるので、秋芽萌芽期に防除を行う。

7) カンザワハダニ

(1) 発生量：並

(2) 根拠 ア 8月の巡回調査では、寄生葉率は1.4%(平成3.0%)と平成よりやや少ない発生であった。

イ 茶業研究所(御船町)の寄生葉率調査では、平成より多い発生であった。

ウ 病虫害防除員からの報告では、8月の発生は平成比やや少～少であった。

エ 気象予報によると、9月の気温は平成並または高く、降水量は平成並の予想である。

(3) 対策 ア 9月は発生が多くなる時期で、今後、発生の好適条件が続くことも予想されるため、茶園をよく観察し、発生を認めたら早めの防除に心がける。

イ 薬剤抵抗性の発達を防ぐため、系統の違う薬剤のローテーション使用を行う。

カンキツ

1) かいよう病

(1) 発生量：やや少

(2) 根拠 ア 8月の巡回調査では、発病葉率2.4%(平成4.1%)、発病果率2.4%(平成7.2%)と平成比やや少の発生であった。

イ 果樹研究所(宇城市)の調査(無防除樹甘夏)では、8月5半旬の発病葉率が2.8%(平成6.7%)、発病果率が14.0%(平成37.0%)と平成比やや少の発生であった。

ウ 病虫害防除員からの報告では、8月の発生は平成比やや多～少であった。

エ 気象予報によると、9月の降水量は平成並の予想である。

(3) 対策 ア 夏秋梢ではミカンハモグリガ食害痕に発病しやすいので、防除を徹底する。

イ 発病した葉・枝・果実は伝染源となるので、剪除する。

ウ 強風雨は、致傷及び水媒により感染を助長するため、防風ネット等の対策を講じる。

## 2) 黒点病

(1) 発生量：並

(2) 根拠 ア 8月の巡回調査では、発病果率 16.8 % ( 平年 11.2 % ) と平年並の発生であった。

イ 果樹研究所(宇城市)の調査(無防除樹興津早生)では、8月5半旬の発病果率が 100.0 % ( 平年 90.2 % ) で、発病度は 18.9 ( 平年 40.9 ) と平年比やや少の発生であった。

ウ 病害虫防除員からの報告では、8月の発生は平年比やや多～やや少であった。

エ 気象予報によると、9月の降水量は平年並の予想である。

(3) 対策 ア 枯枝は伝染源となるため、剪除する。剪定くず等も、園外に持ち出して処分する。

イ 定期的に園を見回り降水量 200 ～ 250 mm または前回散布から 25 ～ 30 日を目安に防除を行う。

## 3) ミカンハダニ

(1) 発生量：やや多

(2) 根拠 ア 8月の巡回調査では、寄生葉率 11.8 % ( 平年 10.5 % ) と平年並の発生であった。

イ 果樹研究所(宇城市)の調査では、8月6半旬の寄生葉率は 15.0% ( 平年 21.4 % ) と平年比やや少の発生であった。

ウ 病害虫防除員からの報告では、8月の発生は平年比やや多～並であった。

エ 気象予報によると、9月の気温は平年並または高く、降水量は平年並の予想である。

(3) 対策 ア ミカンハダニの要防除水準は、メス成虫寄生葉率 30 ～ 40 %、10 葉当り 5 ～ 10 頭である。

イ 薬剤抵抗性の発達を防ぐため、系統の違う薬剤のローテーション使用を行う。

## 4) チャノキイロアザミウマ

(1) 発生量：並

(2) 根拠 ア 8月の巡回調査では、被害果率 2.0 % ( 平年 3.7 % ) と平年並の発生であった。

イ 病害虫防除員からの報告では、8月の発生は平年並～やや少であった。

ウ 気象予報によると、9月の気温は平年並または高く、降水量は平年並の予想である。

(3) 対策 ア 発生程度の調査は、展着剤あるいは洗剤を 5,000 ～ 10,000 倍に薄めてコップに入れ、その中で果実(100 果)を洗う。洗った液をティッシュペーパーでこし、ルーペ等で虫を数える。15 頭以上を確認した場合直ちに防除する。

## ナシ

### 1) 黒星病

(1) 発生量：やや多

(2) 根拠 ア 8月の巡回調査では、発病葉を認めなかった(平年の発病葉率 0.6 % )。

イ 病害虫防除員からの報告では、8月の発生は平年比多～並であった。

ウ 気象予報によると、9月の気温は平年並または高く、降水量は平年並の予想である。

(3) 対策 ア 9月以降に増加する秋型病斑は、葉裏面に薄いスス状の病斑を形成する。鱗片に感染した場合、翌春の伝染源となるため、収穫後の防除を徹底する。

### 2) うどんこ病

(1) 発生量：並

(2) 根拠 ア 8月の巡回調査では、発病葉率 1.3 % ( 平年 0.7 % ) で平年並の発生であ

った。

イ 病虫害防除員からの報告では、8月の発生は平年比やや少～少であった。

ウ 気象予報によると、9月の気温は平年並または高く、降水量は平年並の予想である。

(3) 対策 ア 収穫期から収穫後に発生し早期落葉により樹勢が低下するので、発生初期に薬剤を散布する。

### 3) ハダニ類

(1) 発生量：少

(2) 根拠 ア 8月の巡回調査では、寄生葉率 2.0 % (平年 5.3 %) で平年比やや少の発生であった。

イ 病虫害防除員からの報告では、8月の発生は平年並～少であった。

エ 気象予報によると、9月の気温は平年並または高く、降水量は平年並の予想である。

(3) 対策 ア 要防除水準は、メス成虫の寄生葉率 20 % 以上、1 葉当り 1 ～ 2 頭である。

イ 薬剤抵抗性の発達を防ぐため、系統の違う薬剤のローテーション使用を行う。

## カキ

### 1) 炭疽病

(1) 発生量：並

(2) 根拠 ア 8月の巡回調査では、発病果率 0.5 % (平年 0.7 %) で平年並の発生であった。

イ 病虫害防除員からの報告では、8月の発生は平年比やや少であった。

ウ 気象予報によると、9月の気温は平年並または高く、降水量は平年並の予想である。

(3) 対策 ア 徒長枝への感染が多いと果実への感染が多くなるため、感染枝はすぐに剪除する。

## 果樹全般 (カキ、ナシ、カンキツ類等)

### 1) カメムシ類

(1) 発生量：多

(2) 根拠 ア 8月の生産環境研究所 (合志市)、果樹研究所 (宇城市)、天草農業研究所 (天草市) における予察灯誘殺数は、平年および多発した平成 14 年と比べ多であった。

イ ヒノキ球果一果当りの平均口針鞘数は、8月下旬に県内 23 地点で行った調査では、天草市五和町の 26.5 本が最も高く、宇城市松橋町、山鹿市、植木町、氷川町、天草市新和町では、20 本を超えていた。平均口針鞘数が 25 本を超えると、餌となるヒノキ球果からの離脱が始まるとされ、樹園地への飛来危険性が高まっている。

ウ 病虫害防除員からの報告では、8月の発生は平年比やや多～少であった。

エ 気象予報によると、9月の気温は平年並または高く、降水量は平年並の予想である。

(3) 対策 ア 発生量には地域差が大きく、局地的に多発する可能性があるため、ほ場をよく見回り成虫の発生に注意し、初期防除を徹底する。

イ 平成 20 年度病虫害発生予察注意報第 1 号 (平成 20 年 8 月 27 日発表) 参照。熊本県病虫害防除所ホームページ「<http://www.jppn.ne.jp/kumamoto/>」に掲載しています。

## 野菜病害

### 夏秋トマト、ミニトマト（高冷地）

#### 1) 葉かび病

(1) 発生量：並

(2) 根拠 ア 8月の巡回調査では、発病株率 2.3 % (平年 57.2 %) と平年比少の発生であった。

イ 病害虫防除員からの報告では、8月の発生は平年比やや多～並であった。

ウ 気象予報によると、9月の気温は平年並か高く、降水量は平年並の予想である。

(3) 対策 ア 草勢が衰えると多発するため、肥料切れしないように、適正な肥培管理に努める。

イ 換気を良くし、過湿防止に努める。

ウ 伝染源となる発病葉や不要な下葉などは早めに取り除き、ほ場で処分する。

エ 早期発見に努め、発病初期のうちに葉の裏面にも十分かかるように薬剤防除を行う。

#### 2) 灰色かび病

(1) 発生量：並

(2) 根拠 ア 8月の巡回調査では、葉の発病株率 33.0 % (平年 30.1 %) で平年並の発生、果実では発病を認めなかった(平年の発病株率 0.3 %)。

イ 病害虫防除員からの報告では、8月の発生は平年並～やや少であった。

ウ 気象予報によると、9月の気温は平年並か高く、降水量は平年並の予想である。

(3) 対策 ア 被害葉や被害果、老化葉は早めに除去し、通風採光を良くする。

イ 薬剤抵抗性の発達を防ぐため、系統の違う薬剤のローテーション使用を行う。

### 夏秋ナス（平坦地）

#### 1) すすかび病

(1) 発生量：やや少

(2) 根拠 ア 8月の巡回調査では、発生を認めなかった（平年の発病株率 2.1 %）。

イ 病害虫防除員からの報告では、8月の発生は平年比少であった。

ウ 気象予報によると、9月の気温は平年並か高く、降水量は平年並の予想である。

(3) 対策 ア 排水を図り、かん水過多とならないように注意する。

イ 伝染源となる発病葉や不要な下葉などは早めに取り除き、ほ場で処分する。

ウ 薬剤抵抗性の発達を防ぐため、系統の違う薬剤のローテーション使用を行う。

#### 2) うどんこ病

(1) 発生量：やや少

(2) 根拠 ア 8月の巡回調査では、発生を認めなかった（平年の発病株率 2.6 %）。

イ 病害虫防除員からの報告では、8月の発生は平年比少であった。

ウ 気象予報によると、9月の気温は平年並か高く、降水量は平年並の予想である。

(3) 対策 ア 通風採光を良くする。

イ 不要な下葉はできるだけ除去する。

ウ 発病初期から薬剤散布を行う。



## イチゴ（育苗床）

### 1）炭疽病

（１）発生量：並

（２）根拠 ア 8月の巡回調査では、発病株率 0.3 % ( 平年 1.9 % ) と平年比やや少の発生であった。

イ 病害虫防除員からの報告では、8月の発生は平年並であった。

ウ 気象予報によると、9月の気温は平年並か高く、降水量は平年並の予想である。

（３）対策 ア 育苗ポットの間隔は広めに取り、不要な下葉などは除去し通風採光を良くする。

イ 罹病株があると降雨やかん水により急速に蔓延するので、定植時には発病していない健全な苗を定植し、また、ビニール被覆するまでは発生に特に注意し、被害茎葉や被害株は速やかに除去し処分する。

ウ 発病後の薬剤散布は効果が低いため、予防散布に努め、風雨の後は防除を徹底する。

エ 薬剤抵抗性の発達を防ぐため、系統の違う薬剤のローテーション使用を行う。

オ 次年度用の親株は、無病苗を選抜し、前年に発生の見られたほ場は親株床として使用しない。

### 2）うどんこ病

（１）発生量：やや多

（２）根拠 ア 8月の巡回調査では、発病株率 0.3 % ( 平年 0.1 % ) と平年並の発生であった。しかし、6～7月の巡回調査では平年より発生が多かったことから、現在は潜在感染している可能性が高い。秋になると再び発病する可能性がある。

イ 病害虫防除員からの報告では、8月の発生は平年比やや多～並であった。

ウ 気象予報によると、9月の気温は平年並か高く、降水量は平年並の予想である。

（３）対策 ア 伝染源となる発病葉や不要な下葉などは早めに取り除き園外に処分する。

イ ほ場の排水を良くし、多湿を避ける。

ウ 定植前まで防除を徹底し、罹病株を本ばに持ち込まないようにする。また、定植後は活着後から開花期までの防除に重点を置く。

エ 多発すると防除が困難なため初期防除を徹底し、薬剤散布は葉裏に十分かかるようにする。

オ 薬剤抵抗性の発達を防ぐため、系統の違う薬剤のローテーション使用を行う。

## 夏秋キャベツ（高冷地）

### 1）細菌性病害（黒腐病、軟腐病、黒斑細菌病）

（１）発生量：並

（２）根拠 ア 8月の巡回調査では、黒斑細菌病が0.3%（平年0.0%）と平年並の発生、黒腐病、軟腐病は発生を認めなかった（平年の発病株率 黒腐病2.6%、軟腐病0.7%）。

イ 病害虫防除員からの報告では、8月の発生は平年比やや少～少であった。

ウ 気象予報によると、9月の気温は平年並か高く、降水量は平年並の予想である。

（３）対策 ア ほ場の排水を良くする。

イ 被害残さの処分など、ほ場の衛生管理を徹底する。

ウ 発病後の防除は困難であり台風や大雨の後に多発するので、予防散布および風雨後に薬剤を散布する。

## 野菜虫害

### 夏秋果菜類

#### 1) コナジラミ類

(1) 発生量：やや多

(2) 根拠 ア 8月の巡回調査では、平坦地のナスでは寄生葉率 21.2 % ( 平成 13.5 % ) と平成比やや多の発生、高冷地のトマトでは寄生葉率 60.7 % ( 平成 32.1 % ) と平成比やや多であった。

イ 病害虫防除員からの報告では、8月の発生は平成比やや多～並であった。

ウ 気象予報によると、9月の気温は平成並か高い予想である。

(3) 対策 ア 施設開口部に防虫ネットを設置し、害虫の野外への飛散を防ぐとともに、施設内の雑草は、重要な増殖源となるので除草する。

イ 黄色粘着トラップを施設内に設置し、早期発見に努める。

ウ 寄生密度が高くなると防除が困難なため、早い時期から防除を徹底する。

エ 薬剤散布は、使用量に注意し、薬液が下位葉や葉裏など植物全体に十分かかるように丁寧に散布する。

オ タバココナジラミバイオタイプQは、有効な薬剤が少ないので薬剤の選定に注意する。

カ 薬剤抵抗性の発達を防ぐため、系統の違う薬剤のローテーション使用を行う。

キ ハウス栽培では、栽培終了時にハウス密閉処理を行い、害虫が死滅してから片づける。

#### 2) アザミウマ類

(1) 発生量：やや多

(2) 根拠 ア 8月の巡回調査では、平坦地のナスでは寄生葉率 7.2 % ( 平成 1.4 % ) と平成比やや多の発生であった。

イ 病害虫防除員からの報告では、8月の発生は平成比多～やや少であった。

ウ 気象予報によると、9月の気温は平成並か高い予想である。

(3) 対策 ア **ミナミキイロアザミウマはキュウリ黄化えそ病の病原ウイルスを媒介するので、ウリ類では本虫の発生に注意し、防除対策を徹底する。**

イ ミナミキイロアザミウマに対しては青色、ミカンキイロアザミウマに対しては青色または黄色の粘着トラップを設置し、早期発見に努める。

ウ 施設内の雑草は、重要な増殖源となるので除草する。

エ 寄生密度が高くなると防除が困難なため、早い時期から防除を徹底する。

オ 薬剤抵抗性の発達を防ぐため、系統の違う薬剤のローテーション使用を行う。

### 冬春果菜類

#### 1) タバココナジラミ

(1) 発生量：やや多 ( 前年比 )

(2) 根拠 ア トマト育苗期に行ったトマト苗トラップ調査では、熊本市で寄生頭数 29 頭 ( 前年 2 頭 ) 、玉名市で 60 頭 ( 前年 49 頭 ) 、八代市で 93 頭 ( 前年 15 頭 ) と、3 地点全てで昨年よりも多かった。

イ 気象予報によると、9月の気温は平成並か高い予想である。

(3) 対策 ア 別枠参照

### イチゴ ( 育苗床 )

#### 1) ハダニ類

(1) 発生量：やや多

(2) 根拠 ア 8月の巡回調査では、寄生株率 22.7 % ( 平成 11.4 % ) で平成比多の発生であった。

イ 病虫害防除員からの報告では、8月の発生は平年並であった。

ウ 気象予報によると、9月の気温は平年並か高い予想である。

(3) 対策 **ア 本ばでの発生は主に寄生苗の持ち込みによるものが多いため、定植前の防除を徹底する。**

イ 寄生密度が高くなると防除が困難なため、発生初期に下位葉を重点に防除する。

ウ 薬剤抵抗性の発達を防ぐため、系統の違う薬剤のローテーション使用を行う。

#### 夏秋キャベツ（高冷地）

##### 1) コナガ

(1) 発生量：やや少

(2) 根拠 **ア** 8月の巡回調査では、寄生株率 8.3 %（平年 21.9 %）で平年比やや少の発生であった。

イ 病虫害防除員からの報告では、8月の発生は平年並～やや少であった。

ウ フェロモントラップによる8月の誘殺数は、阿蘇市波野と山都町鶴底で平年比やや少であった。

エ 気象予報によると、9月の気温は平年並か高い予想である。

(3) 対策 **ア** 寄生密度が高くなると防除が困難なため、早期発見、早期防除に努める。  
また、幼虫は葉裏に寄生しているので、薬剤は葉裏まで十分かかるように丁寧に散布する。

イ 薬剤抵抗性の発達を防ぐため、系統の違う薬剤のローテーション使用を行う。

ウ 収穫残さは発生源となるので、直ちに処分する。

#### 野菜全般

##### 1) ハスモンヨトウ

(1) 発生量：並

(2) 根拠 **ア** 8月の巡回調査では、平坦地ナスで寄生株率 1.2 %（平年 0.7 %）で平年並、イチゴで寄生株率 1.0 %（平年 1.3 %）で平年並、キャベツで寄生株率 1.7 %（平年 1.7 %）で平年並、高冷地トマトでは発生を認めなかった（平年の寄生株率 0.1 %）。

イ フェロモントラップによる8月の誘殺数は、生産環境研究所（合志市）高原農業研究所（阿蘇市）、い業研究所（八代市）、阿蘇市波野で平年並、山都町鶴底で平年比やや少であった。

ウ 病虫害防除員からの報告では、8月の発生は平年比やや多～やや少であった。

エ 気象予報によると、9月の気温は平年並か高い予想である。

(3) 対策 **ア** 老齢幼虫になると薬剤の効果が劣るため、早期発見に努め、若齢幼虫期の防除を行う。

イ 施設栽培では成虫の侵入を防ぐため、施設の開口部を防虫ネット等で被覆する。なお、ネット上に産卵することもあり、ふ化幼虫が施設内に侵入することもあるので注意する。

ウ 卵塊や分散前の若齢幼虫を発見したら直ちに除去する。

エ 薬剤抵抗性の発達を防ぐため、系統の違う薬剤のローテーション使用を行う。

オ 最新のフェロモントラップデータは、病虫害防除所のホームページ（<http://www.jppn.ne.jp/kumamoto/>）を参照。

##### 2) オオタバコガ

(1) 発生量：並

(2) 根拠 **ア** 8月の巡回調査では、平坦地のナスで寄生株率 0.4 %（平年 0.1 %）で平

年並、高冷地のトマトでは発生は認めなかった（平年の寄生株率 0.1 %）。  
イ フェロモントラップによる 8 月の誘殺数は、高原農業研究所（阿蘇市）で  
昨年並、生産環境研究所（合志市）で平年比やや多、い業研究所（八代市）  
と山都町鶴底で平年比やや少であった。

ウ 病害虫防除員からの報告では、8 月の発生は平年比やや多～やや少であっ  
た。

エ 気象予報によると、9 月の気温は平年並か高い予想である。

（3）対策 ア 老齢幼虫になると薬剤の効果が劣るため、ほ場をよく見回り、早期発見に  
努め、若齢幼虫期の防除を行う。

イ 施設栽培では成虫の侵入を防ぐため、施設の開口部を防虫ネット等で被覆  
する。

ウ 薬剤抵抗性の発達を防ぐため、系統の違う薬剤のローテーション使用を行  
う。

エ 最新のフェロモントラップデータは、病害虫防除所のホームページ  
（<http://www.jppn.ne.jp/kumamoto/>）を参照。

## トマト・ウリ類の育苗期から定植初期の防除

近年問題となっているトマト黄化葉巻病、ウリ類の黄化えそ病、ウリ類退緑黄化病  
は、育苗期や定植初期に感染すると被害が大きくなります。

トマトの休作期間を設定している産地では、タバココナジラミのウイルス保毒虫率  
が前作終了後から 1 ヶ月以上経過すると大幅に低下しますが、保毒虫が完全にいなく  
なるわけではありません。今後の発生を抑制するためには、以下の防除対策を徹底す  
ることが必須です。

### < 育苗期から生育初期の防除対策 >

#### 播種・定植前の管理：

施設周辺及び内部の野良生えトマトや雑草は、ウイルスの伝染源、コナジラミ類、  
スリップス類の生息・増殖場所となるので、必ず播種や定植の 10 日前までに除去  
する。さらに、育苗期から栽培期間中も定期的に除草する。

#### 施設内へのコナジラミ類・スリップス類の侵入防止：

育苗施設やハウス等の開口部（天井、サイド、換気部など）には目合い 0.8 mm 以  
下の防虫ネットを必ず設置し、コナジラミ類やスリップス類の侵入を抑制する。特  
に、育苗時に感染すると感染株は収穫皆無になる恐れがあるため被覆を徹底する。

なお、目合いを小さくするほど侵入阻止効果は高いが、高温対策に留意する。

また、育苗ハウスは近紫外線除去フィルムを天井に使用するか、ハウス周囲に光  
反射マルチを 150 cm 幅で設置し、できるだけ侵入抑制を図る。

#### コナジラミ類・スリップス類の早期発見：

黄色または青色粘着トラップを施設内に設置し、コナジラミ類やスリップス類の  
早期発見に努める。

#### 感染源の除去：

発病株は二次伝染源となるので、見つけしだい直ちに抜き取り施設外に持ち出し  
埋没処分するか、ビニール袋等に入れて完全に枯れるまで密封処理する。

#### 薬剤防除：

防虫ネットのみでは、コナジラミ類やスリップス類の侵入を完全には防げないた  
め、薬剤防除を併せて徹底する。また、育苗期後半、定植時には粒剤を施用する。

（注意：農薬使用にあたっては、使用方法、使用時期、総使用回数等を厳守する。）

## 農薬安全使用上の留意点

薬剤防除を行う際は、必ず登録のある農薬を使用し、ラベルなどで使用方法を確認し、収穫前使用日数や使用回数、希釈倍数等を遵守しましょう。

また、薬剤が周辺作物へ飛散しないよう飛散防止対策を徹底しましょう。

詳しい内容等については

生産環境研究所病害虫研究室（病害虫防除所）（TEL：096-248-6490）にお問い合わせ下さい。

なお、本文はホームページ「<http://www.jppn.ne.jp/kumamoto/>」上に掲載しています。